

【様式10】

※印欄記入不要

2017年12月15日

| | | | | |
|------------------------|------|-----------------------------------|-------------|--------------------|
| ※報告番号 応 甲 第 不 乙 第 号 | 学籍番号 | 86150001 | 研究指導 教 員 | 大津由紀雄 [㊟] |
| | 氏 名 | Tabolt Joseph Robert [㊟] | | |

学 位 論 文 内 容 要 旨

応用言語学研究科
博士後期課程

学位論文題目 Possibilities in discourse: The pragmatic presuppositions of epistemic *may/might* and *must*

氏 名 : Tabolt Joseph Robert

研究指導教員 : 大津由紀雄

学位論文要旨

本論文の目的は認識的法助動詞である *may/might* 及び *must* による言明が伝達するコミットメントを特定し、そのコミットメントがどの点において異なるのか、どの点において類似するのか、また前後の談話によってどのような影響を受け、談話に展開にどのように影響するのかを説明することである。本論文に含まれる提案は、発話時において、協調の原理 (Cooperative Principle、以降 CP) (Grice, 1989) に導かれ、認識的なモーダル命題の意味論的意味 (Kratzer, 1977, 1981, 1991, 2012) が共通の土台 (common ground、以降 CG) (Stalnaker, 1973, 1978, 1996, 2002) に含まれるビリーフとどのような相互作用をするのかの説明を試みたものである。

モーダル言明の命題内容は、CP の量的要求によりモーダル・ベースを経由して系統的に規制されることを示す。量的要求を考慮することによって、真理条件のみで予測されるより多くの情報が共通の基盤に加わることが予測されることになる。これは、経験的に適格な真理条件の特定、モーダル言明の主観性と客観性の区別、モーダル言明に対する聞き手の同意・不同意に関する事実、モーダル文がどのような環境において埋め込まれるかということに関する事実、「提案する」という発話行為の仕組み等、認識的モダリティを巡る中心的な多くの取り組みにとって示唆を与える。

可能世界理論を用いた意味論では、認識的モーダル文の中に埋め込まれた命題 (以降 *prejacent* と呼ぶ) が話し手の知識に関して可能・必然であることを意味する。Stalnaker の言明 (assertion) のモデルでは、言明は言明された命題の真理条件的内容を共通の基盤に加えるための提案である。そのため、モーダルの命題の言明を受入れることが「*prejacent* が話し手の知識に関して可能・必然である」ことが CG に加わることに帰結するはずである。また、談話の他の参加者の *prejacent* に対す

るコミットメントに関わる変化には帰結しないはずである。しかし、実際においてはそうはならない。

(1) *There's a knock at the door*

"That may/must be Bob." -- "I see. ?I doubt it."

聞き手は I see を発話することによって話し手の命題を受入れることを合図する。次に、二つの文を発話する間に新しい知識を得ていないことを想定し、prejacent が疑わしいということを言明することによって自分自身と矛盾してしまう（尚、特に有標なイントネーションの場合に may は疑念を表すこともある。ここではその解釈は関心の対象ではない）。つまり、経験的には、モーダル言明の受け入れによって CG に加わると捉えられているのは「prejacent が話し手の知識に関して可能・必然である」だけではないということである。理論的な想定に反して、受け入れた本人の知識に関する prejacent のステータスにも変更を及ぼしたと捉えられているのである。

一般的には、言明は、言明された命題の内容に対する公的なコミットメントであり、公言された事実により、聞き手にもその内容に対してコミットすることを促すものであるというように捉えることができる。我々は、話し手のモーダル言明の受け入れが聞き手自身のビリーフにも変化を及ぼすと捉えている事実を考えると、話し手の言明を、自分の知識に関する prejacent の必然性・可能性以外の要素も含むコミットメントとしている解釈していると考えられる。そこで生まれる疑問は「モーダルの命題を言明することによって話し手は何に対してコミットをしているのだろうか」ということである。

この問いを追究する方法の一つとして、極性疑問文と非モーダル言明におけるモーダル言明との類似点・相違点、を特定することが挙げられる。標準的な可能世界流の意味論において、must のような必然性を表す演算子は、認識的な解釈においては、話し手が知っていることに関して prejacent が唯一の可能性であることを表すとされる。これは、話し手は prejacent が真であることを知っていることを含意する。従って、must は、言明された命題が真であることを意味する非モーダル言明と一見類似している。

May/might のような可能性を表す演算子は、認識的な解釈において、話し手が知っていることに関して prejacent が真でも偽でも在り得ることを表す。従って、may/might は、聞き手が問われている命題が真であるか偽であるかを知らないことを表す極性疑問文と一見類似している。しかし、これら二点の類似点によって、話し手が may/might と must を言明することによってコミットする内容がうまく捕らえられるとは言えない。

(2) 疑問： Did John leave already? No, he didn't.

(3) 可能性の言明： John may have left already. ! No, he didn't.

(4) 必然性の言明： John must have left already. !! No, he didn't.

(5) 非モーダルの言明： John left already. !!! No, he didn't.

上記の4つのやり取りにおいて、感嘆符の数で表記されている通りに、発話された命題に対する否定が段階的に対立性を増していく。疑問文は真であることに対しても偽であることに対してもコミットメントを表さず、非モーダルの命題は真であることに対するコミットメントを表すというように、John left already に対するコミットメントの、強さの度合に違いがあるようである。(2)~(5)の間で認識される(3)、(4)が疑問文より強いので、may/might と must は John left already に対して何らかの肯定的なコミットメントを表すことわかるが、非モーダルの言明より弱いので、真であることへのコミットメントを表さないということもわかる。そこで生じる疑問は「命題が真であること以外に話し手は何に対してコミットできるのだろうか」ということである。

Kratzer は、(4)と(5)の違いを説明することを動機の1つとして、人的(human)モダリティの意味論を提唱している。この枠組では、認識的 may/might やは「標準的な(stereotypical)可能性」を表す。May/might が表す「標準的な可能性」において prejacnt が認識的に可能だけでなく「認識的に可能かつ標準的な成り行き」である。一方、must は唯一の認識的に可能かつ標準的な成り行きであることを意味する「標準的な必然性」を表す。Kratzer の提案下ならば、認識的モーダルの言明によって伝達されるコミットメントは prejacnt の標準的可能性・必然性に対するものであると仮定できる。これは必然性の場合ほうまくいくが、可能性の場合は問題が生じる。

次のことを想定する：ジョンは他の予定がある場合に John left が標準的な可能性であり、パーティーで気になっている女性がいる場合に John did not leave が標準的な可能性である。(4)を真である命題として発話するためには、話し手はジョンに他の予定があることを知っている必要があり、逆にジョンが気になっている女性がいることを知ってはいけない(尚、事実としてはいてもいなくても良い)。一般的には、聞き手が人的必然性の言明の命題内容から帰納できるのは、話し手は prejacnt に対する肯定的な証拠を持っており、prejacnt の対義文に対する肯定的な証拠がないと信じているということである。必ずしも prejacnt が真であることに対するコミットメントではないが、肯定的なコミットメントであることに変わりはない。しかし、この場合でも、「話し手の知識によって prejacnt に対する肯定的な証拠があり、prejacnt の対義文に対する肯定的な証拠がないことを受け入れることが聞き手の、prejacnt に対するコミットメントに転用されるのはなぜなのか」という疑問が残る。

さらに、(3)に関しては採用している意味論は肯定的な証拠を要求しないという課題がある。(3)が偽であるのは、話し手が prejacnt が偽であることを知らない限りにおいては、John did not leave が人的に必然である場合のみである。つまり、話し手は John が気になっている女性がいることを知らない限り真である命題として

(3)が発話できるのである。一般的には、真である人的可能性の言明から聞き手が真理条件に基づいて帰納できるのは、話し手が **prejacent** が標準的な成り行きであることと矛盾する知識（この場合、ジョンが気になっている女性がパーティーにいる知識）を持っていないということのみである。

このように、真理条件上、**may** のモーダル命題を真である命題として発話するための十分条件が話し手の知識の欠如であり、**may** の言明が **prejacent** に対して肯定的なコミットメントを含意しないはずである。従って、人的モダリティでも可能性の言明が極性疑問文より強いコミットメントを表す理由を提供しないのである。可能性において、話し手のコミットメントを聞き手のコミットメントへ転換させる前に、話し手のコミットメントの所在を特定する課題があるのである。

量の要求を考慮に入れることで、モーダルの言明によって話し手のどのようなコミットメントが伝達されるか、また話し手の知識に基づく **prejacent** に対するコミットメントが **CG** において聞き手の **prejacent** に対するコミットメントに転用される仕組みがどのようなものかという二つの問いがともに解決できる。話し手が **CG** を更新しようとしているという **CP** に基づく聞き手の期待により、聞き手は話し手が使用するモーダル形式の意味に基づき非モーダルの語用論的前提（即ち、話し手がコミットしているとして聞き手によって捉えられている非モーダルの命題）が抽出できることを提案する。

語用論的な前提の抽出過程は **CG** の状態に依拠する。量の規則を維持しつつ言明を行うためには、話し手は自分の命題が **CG** に貢献できると信じていなければならない。**CG** はある命題が真であることも偽であることも可能であることしか含意しない場合、人的モダリティの言明によってその命題に対する肯定的な証拠が存在するというビリーフを加えることができる。聞き手は話し手に、量の規則を守っていることを期待するため、モーダル言明を行った話し手に自分が肯定的な証拠を持っていると信じているということも期待する。

人的必然性の場合、上記の期待は話し手の自分の知識に関するモーダルのコミットメントが、協調の原理により、実際の世界に関する非モーダルのコミットメントとして解釈されることに帰結する。一方では、可能性の命題は真である条件として話し手の知識の欠如で満たされるが、可能性の言明は共通の土台を更新しなければならないため、聞き手は、話し手が **prejacent** に対する肯定的な証拠を持っていないならば人的可能性を言明しないと想定する。言明を、話し手がこのような肯定的な証拠を持っていることのシグナルとして捉えた上で受け入れるならば、聞き手も **CG** において **prejacent** に対する肯定的な証拠が存在するというビリーフにコミットすることになる。このように、量の規則に規制された人的モダリティの意味論はモーダルの言明を行うことにより話し手が伝達する自分の肯定的なコミットメントと、そのコミットメントが **CG** において聞き手のコミットメントへ転用される仕組みの説明ができる。

必然の言明により、話し手は **prejacent** に対して肯定的な証拠があり、**prejacent** の対義文に対しては証拠がないことにコミットする。つまり、話し手のコミットメ

ントとして捉えられる二つの非モーダルの語用論的前提を生み出すのである。可能性の言明により、話し手は **prejacent** の対する肯定的な証拠があることにコミットするが、その対義文に対してはコミットしない。つまり、可能性の言明も話し手のコミットメントとして捉えられる非モーダルの語用論的前提を生み出すが、コミットメントを伴わない語用論的前提も生み出すのである。

Prejacent に対して一つ、**prejacent** の対義文に対して一つ、モーダルの言明によって発生されるこれらの 2 つの語用論的前提は談話において「モーダル・イシュー」を挙げる。モーダル・イシューは CG に関するある命題の可能な「可能性の配置 (Possibility Configurations)」を絞り込もうという申出として解釈できる。人的モダリティの意味論では、ある命題とその対義文は両方とも標準的に可能であることが許される (例えば、他の予定あるため **John left** が標準的に可能であると同時に、気になっている女性がパーティーにいるために非標準的に可能でもある場合)。これを含め、命題とその対義文で形成される 5 つの可能性の配置が可能である: [1] $p_{\text{impossible}} \ \& \ \neg p_{\text{epi.necessary}}$ [2] $p_{\text{epi.necessary}} \ \& \ \neg p_{\text{impossible}}$ [3] $p_{\text{astereo.possible}} \ \& \ \neg p_{\text{stereo.necessary}}$ [4] $p_{\text{stereo.necessary}} \ \& \ \neg p_{\text{astereo.possible}}$ [5] $p_{\text{stereo.possible}} \ \& \ \neg p_{\text{stereo.possible}}$ 。可能性の配置を絞り込む方法として、**prejacent** に対する肯定的な証拠があるか、**prejacent** の対義文に対して肯定的な証拠があるか、または談話参加者の知識が十分である場合、認識的に必然 (真であることを含意する) であるか、不可能 (偽であることを含意する) であるかを巡る談話参加者同士の関連ビリーフのやりとりが挙げられる。

このように、認識的モーダルは、人に関心のある命題に関して、当該の談話イベントの参加者の誰もが真であるか偽であるかを決定づけるための十分な知識を揃えてない場合に、体系的な談話過程を通してその命題に関して共通の土台を精緻化することを可能にする。認識的モーダルの言明や解釈は、意味論、共通の土台、協調の原理が別々ではあるが統合された役割を果たす三部から成る過程である。そのような過程の妥当な説明は三部揃ったの接触面を把握する以外、達成できないのである。